

秋月藩「女男石」の水利システム

島谷 幸宏¹

¹フェロー会員 九州大学教授 工学研究院環境社会部門（〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744）

E-mail:shimatani@civil.kyushu-u.ac.jp

女男石は扇状地の扇丁部の構造物である。扇丁部の治水の要点は、河川の流路固定と旧河道を利用した用水路への配水である。有名なものは山梨の信玄堤や万力林であるが、この女男石もこの類似の構造物とみていい。女男石は、秋月藩家老、堀平右衛門が1620年代に構築したと推定される、近世初期の古い水利施設であり、現在においても機能している点を含め、歴史的に重要な構造物である。

Key Words : *historical heritage, flood control, Koishihara river, alluvial fan, Meotoishi*

1. はじめに

女男石（めおといし）は福岡県朝倉市に現存する扇状地扇丁部の近世初期に作られた治水、利水の機能を持った水利構造物である。現在においても一部は現存しその機能は十分に発揮されている。本論文では、女男石の水利機能について筆者の推論を述べるものである。

女男石の字は文献により「夫婦石」「女男石」など異なる。文献中は記載通りに示すが、本文中は、現在の地名である女男石を用いる。



図－1 女男石位置図

2. 位置

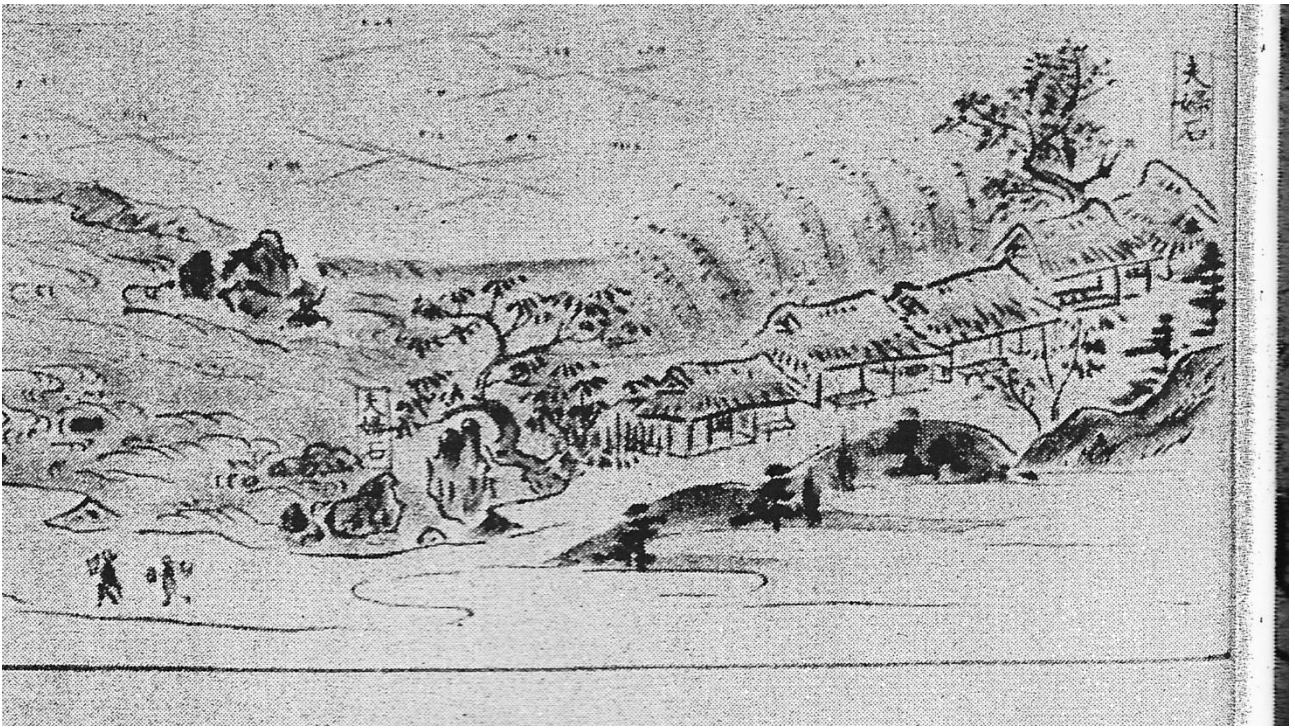
小石原川は、1級河川筑後川の1次支川でその源を福岡県朝倉郡東峰村立ヶ隠付近に発し、中流の女男石地点付近より扇状地を形成して平野部の朝倉市の市街地西縁を南下し、筑後川の39.8 km地点に合流する。流域面積は85.9 km²、流路延長は34.5 kmの中小河川である。

秋月城下町を西流した小石原川は扇状地扇丁付近で野鳥川を合流し、流路を大きく南に変える。流路の向きを変える地点に女男石は存在する。女男石の直下流には福岡導水の女男石取水口がある。小石原川は女男石地点より流路を扇状地の南側を流下する。

女男石は小石原川に設置された2つの巨石からなる一対の立岩であるが、この地点の地名にもなっている。

3. 成立と経緯

女男石の正確な成立年代はわからないが近世の初期であることは明らかである。「小石原川が西から東へと屈曲するこの地域では、度々水害が発生し、藩政時代より治水事業が繰り返行われてきた。女男石はこの河川屈曲部にある大岩をいい、秋月藩初代藩主黒田長興が家老堀兵（平の誤り）右衛門に命じて行った護岸工事に際して、据え置かれたものと言われている。境内には宝暦9年の銘がある。」¹⁾と県の報告書にはある。黒田長興が秋月藩を立藩したのが1623年、1628年に堀平右衛門は長興と諍い、京都に出奔していることから、女男石の



図一 筑前国続風土記附録（1793）の夫婦石の絵図

この図を見ると、右岸側には大きな女男石とその上流側に水中にいくつもの巨石が見える。また、その下流には河岸に竹が植えてあり、水害防備林のように見えるが、現在は竹は見られない。また、対岸には大きな岩が見られる。しかし現在みられる護岸の石積みはわからない。

成立は1623年から1628年の間と推測される。このように女男石は近世初期の1620年代に作られた古い水利施設である。ちなみに加藤清正が熊本で活躍したのが1598―1618年、佐賀で成富兵庫が活躍し石井樋を完成させたのが1623年であり、北部九州で水利事業が盛んに行われていた時期に相当する。

貝原益軒の筑前続風土記²⁾（1709年）には、「婦夫石、秋月と弥永村との間の川辺にあり。大石二相對せり。故名づく。その辺りに民家あり。夏月此の辺り螢火多し。長谷山村に属す。婦夫石と名付けし大岩、此の郡の栗田郡、志摩郡吉田村にもあり。奥州会津の志摩郡にも婦夫石とてあり。二石わかれ立つ故、はなれ石とも云う。唐土の典籍便覧にかけける陰陽石といえるも、大石の二立並びたるをいへれば、是と同じかるべし。」とある。

吉田平陽が著した天保年間の望春随筆³⁾には「享和二戌（1802）五月廿六日、大雨洪水所々流損、女男石石垣崩、下流農家九軒流出。其の外在々大破に及ぶ。土俗伝えて云。女男石の石垣は三重也。二かわ目は家の外れに有。三側目は往還之中程に有と云。されとも其真偽知らさしか此時の水に外側崩れ、二かわ目にて止まりたり。今之石垣是也。さすれば三側目は道の中程に有と云事疑有へからず。是堀平右衛門之仕置きをいふ。」とある。

また、田代政栄は吉田平陽の上記文章を引用しつつ「されば三側目の石垣は道の中ほどにあると云うこと疑いなし、そがため、女男石の屋敷内には井戸堀適当な地なし。此の水の難所を征服する為に三重石垣の外に巨大なる巖を女男石と云うて水の激る際難所置きて水を防ぎたり、此の女男石の大岩は川向こうの天神森より採り来たりしものなり、天神社の所より持ち来たりれば此の種類の石は建築上殊に敷石等には用いずと云えり、この一大工事は当年の職分堀平右衛門の仕置きなり。」と述べている。

これらを要約すると、

- ① 女男石は黒田長興が堀平右衛門に命じて作らせた。
- ② 成立年は1623-28年の間である。
- ③ 一対の大きな岩からなり、その岩は対岸の天神森から切り出された。
- ④ 1802年の洪水の時には女男石の石垣が崩れて、2重目の石垣が出てきた。3重目までであるといわれている。

4. 女男石の構造

図一に筑前国続風土記付録(1793年)の女男石の絵図を示した。小石原川の右岸側には大きな対の岩（夫婦石）とその上流側に水中にいくつかの巨石が見える。巨石

の周りでは、水が乱れ波だっている様子が描かれている。また、その下流には河岸に竹が植えてあり、水害防備林のように見える。この竹林は現在は見られない。また、女男石より上流左岸側にも大きな岩が見られるが、これも現在は存在しない。

図-3に女男石の平面図を示した。小石原川が流れの向きを変える地点に、大きな2つの岩すなわち女男石を配置している。大きな岩に流れをぶつけ、減勢とともに流れの向きを変えるためと考えられる。さらに右岸の河床沿いには巨石が多数投入されている。この巨石は女男石より下流にも存在する。流れを減勢するために配置されたものと推測される。女男石地点より下流で河岸が左岸側に張り出している。水の流れを変えるためであろう。さらに階段を利用し、のこぎり状に河岸ラインはなっている。ここにも流れを左岸側に寄せる意図が見られる。女男石の下流には福岡導水および下流の農業用水である草場川の取水のための女男石頭首工が設置されている。

図-4に女男石上流から撮影した写真を示した。正面に見える2つの岩が女男石で、片側は倒れている。その下流に河岸が大きく左岸側に張り出しているのが分かる。

図-5に図-4の撮影地点から河岸沿いの水中を撮影した。大きな石が河床に設置されているのが見える。これらの巨石は減勢のために設置したと推測している。

女男石の上下流の護岸は石積みの護岸である。図-6に示すように、下部には比較的大きな石が、しかも石の積み方は水平方向に揃うように積んである。一方、上部はより小さな石を用い、乱積みのような積み方をしている。元名護屋城博物館館長の高瀬哲郎氏は、下部の石積みは慶長年間以前とみられる古いもので、上部は護岸が壊れたときに積みなおされたものと診断している。

図-7には階段を用いて鋸状に護岸を設置している状況を示した。

底石の設置、大きな女男石に正面から水をぶつけるなどの状況からエネルギーを減勢するための工夫がなされている。さらに、河岸の張り出し、のこぎり状の護岸線形などから、流路を左岸に寄せようとする仕組みである。規模は小さいが信玄堤と類似の水利施設といえる。

5. 水利システムとしての女男石

図-8に女男石周辺の地形を示した。前述してきたように女男石は扇状地扇丁部に位置し、小石原川はそこから下流で扇状地の南端を流下している。扇状地の北端には、女男石頭首工から取水した用水路である草場

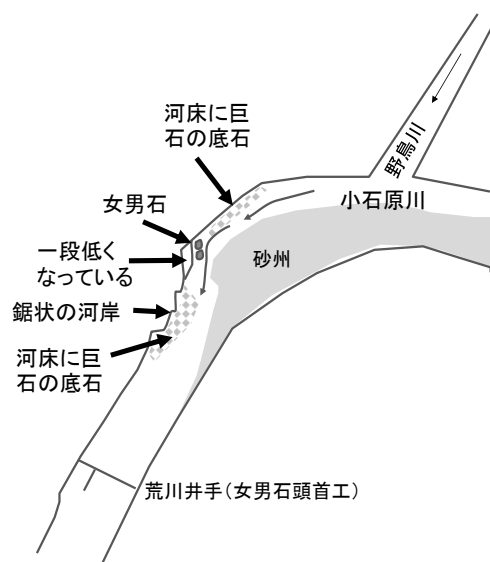


図-3 女男石平面概念図



図-4 女男石上流からの写真

2つの大きな岩が女男石。女男石は近年徐々に倒れている。



図-5 河床の巨石

減勢のために入れたと思われる河岸沿いの巨石

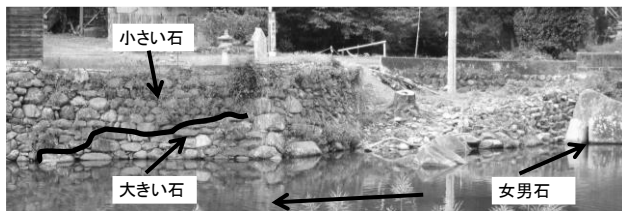


図-6 女男石前後の石積みは下部と上部で異なる



図-7 階段を用いて鋸状に河岸を張り出している

川が流下している。現在においても草場川は重要な用水であるが、合わせて福岡都市圏に水を供給する福岡導水の取水口でもある。

川を南に固定し、用水をその地点から旧河道に導くための一連の施設が女男石と考えてよいであろう。湾曲して流れてきた小石原川を女男石にぶつけ、その場所が洪水で破られないようにし（流路が扇状地面の北川に行くのを抑制しと言った方がいいかもしれない）、流路を曲げるための構造物である。あわせて、洪水の流れが激しいため、エネルギーを消散させるために右岸沿いの川底に巨石を多数配置する工夫（現在の工法でいえば根固め水制工）がなされている。この底石のようなエネルギーを減勢させる仕組みは全国的にもまれである。

特別大きな2つの岩である女男石は、この一連の水利技術の中の象徴的な構造物である。直流した洪水はこの大きな岩にぶつかることでエネルギーが削がれ、後ろの護岸への水位の上昇を抑制する。

女男石には強い流れが当たるため、享保年間に被災を受けた記録が残っている。天保年間に書かれた望春随筆によれば、1重目の護岸が壊れ、2重目の護岸が出てきたとある。3重の護岸になっているが、現在では確認できないが類似の構造物として緑川の2重石垣があり、加藤清正の技術との関連が考えられる。

また下流に荒川井手と呼ばれる固定堰があったが、福岡導水事業により撤去された。川底には巨石の敷石が見られる。女男石の設置は草場川への安定的な取水が重要なポイントであったものと思われる。この用水路は扇状地北部を通り筑前町の方まで流れており、広い水田へ水供給を行っている。

佐藤尚隆氏⁵⁾によれば、秋月藩の慶長年間に増加し

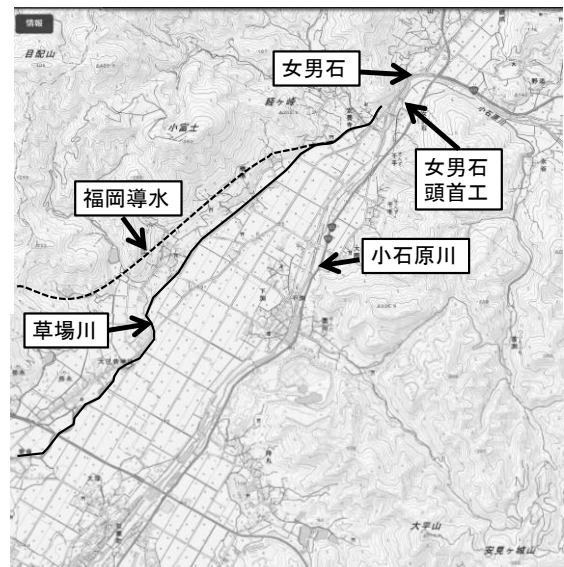


図-8 女男石の水利システム

女男石によって小石原川は扇状地南部に流路が固定された。旧河道と思われる草場川は用水路として活用された。扇状地の河川処理として伝統的な技術である。



図-9 慶長年間の増加石高 草場川沿いが多い

た水田は荒川井手掛461石、荒川井手掛以外135石と荒川井手掛が圧倒的に多い。女男石は秋月藩成立時の耕地開発のために進められた一連の治水水利施設であり、藩の経済基盤を構築する重要な施設と考えられる。

同時代の加藤清正や成富兵庫の技術との類似性も高く交流があった可能性もあるが今後の研究課題である。女男石は北部九州の近世初期の治水技術を考えるうえでも重要な治水遺構であると評価できる。

参考文献

- 1) 福岡県報，秋月街道，2003.
- 2) 貝原益軒，筑前続風土，1709.
- 3) 吉田平陽，望春随筆，1835.
- 4) 田代政栄編，秋月史考，秋月史考刊行会，1951..
- 5) 佐藤尚隆，秋月城下町と女男石シンポジウム資料，2013.

(2015.4.6 受付)